

キーン・ソード19: 国内初、米軍機C-130Jからの陸自降下訓練 *Keen Sword 19: Historic first JGSDF jump from USAF C-130Js in Japan*

November 7, 2018

By Yasuo Osakabe
374th Airlift Wing Public Affairs

日米共同統合演習「キーン・ソード19」で11月4日、大分県の日出生台演習場を舞台に、国内初の米軍第36空輸中隊所属輸送機C-130Jスーパーハーキュリーズからの陸上自衛隊員のパラシュート降下訓練が行われた。

在アラスカ米陸軍の隊員同行のもと、陸自第1空挺団の隊員が共同運用を演練する「キーン・ソード19」の一環として、C-130Jスーパーハーキュリーズから降下訓練を行った。

「日本国内で陸自のパラシュート部隊が米軍機から降下できたことは素晴らしいことだ。また、我々第36空輸中隊が日出生台演習場上空を飛行するのは初めてのことであった。普段とは異なる環境で飛行することは新鮮だった」と、第36空輸中隊C-130Jパイロットで同演習任務指揮官のジェフリー・ラーキン大尉は述べた。

2015年以来、第36空輸中隊と陸上自衛隊第1空挺団は「レッド・フラッグ・アラスカ」演習で合同降下訓練を実施している。この歴史的な国内初の合同降下訓練をもって、日米の隊員たちは、将来もこうした演習を継続し、二か国間の絆を強化できることを期待している。

「日本の空挺隊員たちと協力することで、絆や友情が深まり、双方の飛行隊員の戦略的な価値感の理解も高まる」と在アラスカ米陸軍降下指揮官のネイサン・グリーア曹長は述べた。

今回の(陸自による)パラシュート降下は、日米の自由で開けたインド太平洋地域への強固な決意を象徴するものであり、C-130Jを使用した共同演習は「キーン・ソード19」の広範囲にわたる突発的なシナリオのほんの一部の機動演習であった。

「我々(第36空輸中隊)は、沖縄から三沢まで、米軍と自衛隊の隊員を輸送し、日出生台演習場で大量コンテナ・デリバリー・システム(CDS)投下も行った」とラーキン大尉は述べた。

シナリオは、福岡県の陸上自衛隊築城基地に前もって到着した陸上自衛隊員120人が、横田基地より810キロメートル離れた大分県の日出生台演習場で米軍輸送機C-130Jからのパラシュート投下訓練を行うもの。

「すべてが素晴らしかった。降下指揮官の視点から見て、彼ら(陸自の隊員たち)は安全かつ正確に降下した。ジャンパーにとってそれは最も重要なことであり、彼らは空挺作戦において、実にプロフェッショナルだった」とグリーア曹長は述べた。

「キーン・ソード」は、米軍と自衛隊が、日本の防衛と地域の安全に必要な空、海、陸海共同作戦の能力を実践する機会である。また同演習は、30年以上に渡って、米国と自衛隊の戦闘即応力と相互運用性を向上させてきた一連の二国間の実動訓練の最新版である。

「このシナリオでは、要請を受けて直ぐに物資や人員を送る戦術的空輸を実践する機会が与えられた。合同演習は、将来起こりうる有事に備えるため米軍と自衛隊の練習方法をより深く理解し、司令を受けた際に合同で支援できるよう準備を整えるのに役立つ」と第36空輸中隊C-130Jロードマスターのブライアン・ゲイツ軍曹は語った。

「キーン・ソード19」には、米国太平洋艦隊、在日米軍、第7艦隊、第5空軍、第374空輸航空団、第18航空団、第35戦闘航空団、第3海兵遠征軍などから米軍の隊員約1万人が参加している。

